

特集 若者 × ジモト

下京青少年活動センター

「大学のまち」「学生のまち」とよばれる京都市。

その名の通り、京都市内に所在する大学・短期大学数は38校、京都市人口の1割に相当する約15万人もの学生が在籍しています*。

世界に誇る寺社仏閣や伝統産業、文化・芸術、学問、食……など、

さまざまな魅力に惹かれ、全国各地、ひいては世界中から、

たくさんの若者がジモト(地元)を飛び出して、ここ、京都にやってきます。

なぜ、京都を選んだのか？

京都からみたジモト、ジモトから見た京都とは？

この先ずっと、京都に暮らし続けたいか？

今回の特集では、京都を軸とした若者たちの「ジモト」観に迫ります。

*京都市「大学のまち京都・学生のまち京都推進計画2019-2023」による。

ジモト？

KYOTO?

ぷちメッセージ

若者の細道

京都精華大学学修支援センター学生相談室
キャンパスソーシャルワーカー
(2011年立命館大学大学院応用人間科学研究科
ユースワーカー養成プログラム修了)



宮江 真矢

こんにちは。現在、大学の学生相談室で働いています。もうすぐ不惑の年になりますが、まだまだ感じっぱなしの39歳です。

僕が大学生だった頃、誰かと比較しては「俺なんかぜんぜんダメだ」と思い、過去と今を比較しては「はあ、あの時はよかったなあ」と思い、とにかく満たされない時間を過ごしていました。満たされない渦に入り込むと、嫉妬と自己嫌悪が掛け合わさり、莫大なネガティブエネルギーが発生して、自分をさらに追い込んでいきました。「自分はまあまあOK」と思うことが、すごく難しかったことを覚えています。何者でもない自分という辛さを、時代と社会のせいにして汚い言葉を吐き捨てていました。

その後、いろんな価値観を持った人たちと交流して、誰かより上とか下とか、前とか後ろとか、わかりやすいモノサシで計って、いちいち自分の位置を確認していく作業を繰り返すことに、人生という貴重な時間を献上するほどの価値は絶対ないと確信しました(出会ってくれた方々、ありがとうございます)。

現在、学生を含め、若者に伝えたい唯一のことは、「奥に進んでいこうぜ」です。自分基準で「～したい」や「～したくない」を勇気をもって選択することができれば、より自由な空間が広がっていくように思います。簡単じゃないですけど、不満が希望に変わる一番の近道だと思っています。

contents

- 3 特集 若者×ジモト
- 8 高校生が作ったページ 高校生が「教育問題」について考える
- 10 シリーズ はたらく若者
- 12 TOPICS 『ユスカル! 2019』開催しました
- 14 ユースかわら版 『じぶんみがきダンス』を開催しましたほか

ユースサービスの理念

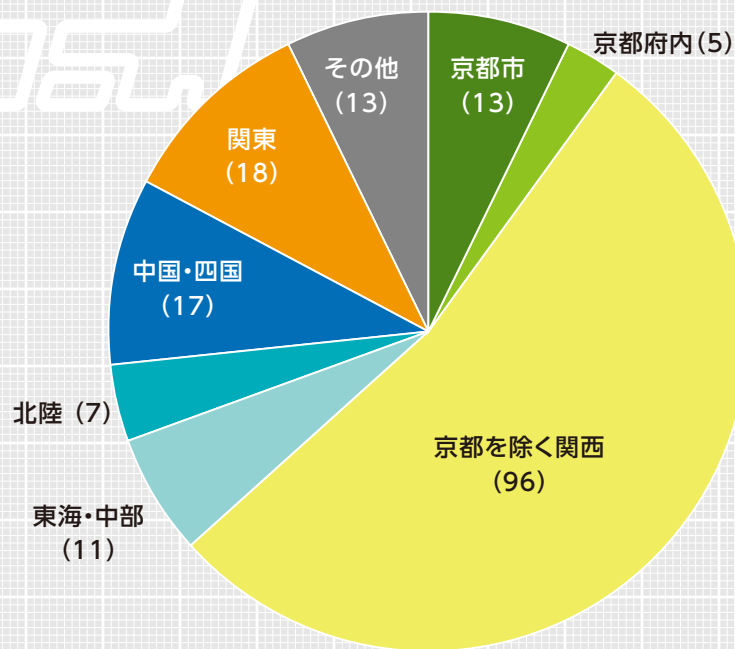
子どもから責任ある大人へと成長する青少年を支援しています。

家庭、学校、地域社会、職場ほか、青少年が自主的な活動場面への参加を通じて、社会と交わり、自身の興味や関心を豊かにし、必要に応じて、助言、情報、または多様な人的・物的資源が得られるような機会を提供します。

特集「アンケート」まとめ

京都で学ぶ大学生は、どうして京都に来たのだろうか？そして京都暮らしをどんな風に捉えているのか、それぞれの「地元」との比較で尋ねてみた。下京青少年活動センターを利用する大学生グループと、二つの私立大学生に授業時にアンケート協力をお願いして、180人の学生から回答を得た。並行して社会人にも回答してもらった。少数(13人)ではあるが、大学生との比較で面白い違いも見えてきた。

出身地(と思う所)



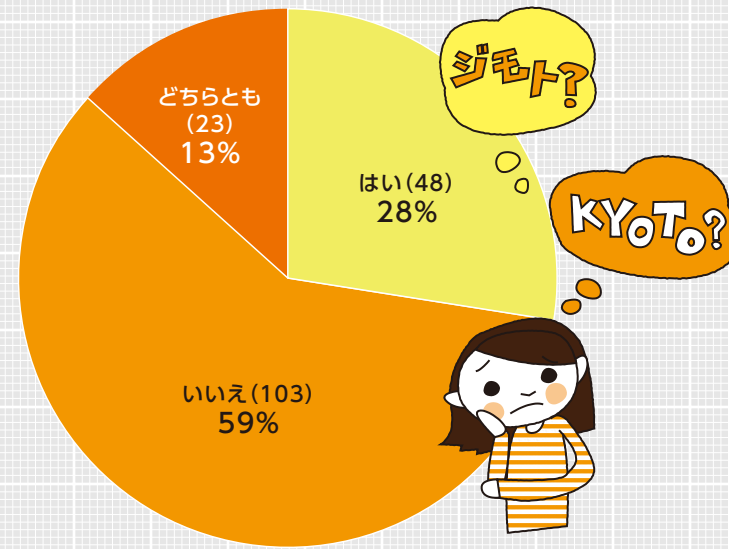
ぜひ私たちといっしょに京都の若者を支えていきましょう！
 京都ユースサービス協会 賛助会員(愛称: ゆうサポ会員)を募集しています。
 みなさまの継続的なご支援により、子どもから大人へと時間をかけて成長していく若者を、安定して支える基盤をつくるのが目的です。ご支援のほどよろしくお願いたします。

公益財団法人
京都市ユースサービス協会
賛助会員
「ゆうサポ会員」募集中

1 京都で暮らすということ

京都に来たきっかけで「京都だから」という明確な理由があったのは約30人(17%)と少ない。逆に「受かった」大学が京都だった、という回答が多かった。また、「卒業後も京都で暮らし続けたい」という比率は28%と予想外に低い。特に関西圏(京都以外)からの学生が低く、京都出身者は半数が「京都で暮らし続けたい」と回答している。数は少ないが社会人の回答(54%)と比較すると差が明らかにありそうだ。京都で暮らし続けたいと答えた人は、「自然が豊か」「落ち着いたところが多い」といった回答から、都会ではあるが小さな町の良さも持っている京都を肯定的に受け止めている。反対に、住み続けたくないという答えの中では、「人・観光客が多い(多すぎる)」「交通の便が悪い」「(気候が)冬寒く、夏暑い」といった点を挙げる人が目立った。

今後も京都で暮らし続けたいか?



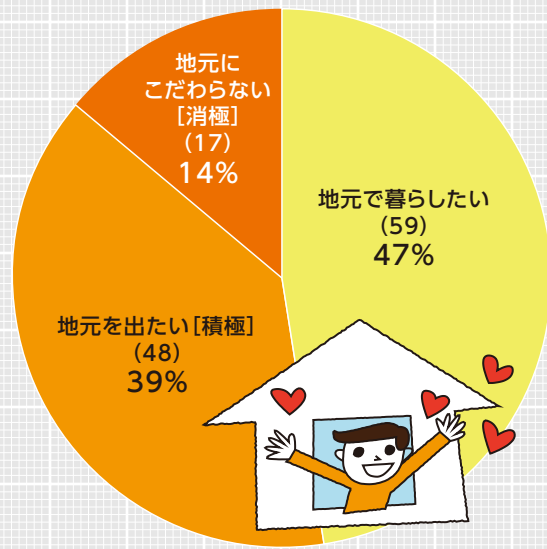
2 地元と京都の違い

関西圏から京都に通学したり、京都で暮らし続けている学生は、京都について「自然が豊か」「景色や街並みがきれい」といった環境についての意見や、「学生が多く、学生にあたかい」といった「人」についての意見が目立つ。また交通環境については「不便だ」という記述も多い。一方、関西圏より遠い地域から来た学生は逆の印象を抱く人も多い。「京都人は怖い」「交通の便が良い」といった意見があり、関西の中での京都の位置付けと、全国の中での京都の違いを窺わせる結果だった。

3 地元で暮らすということ

今回の特集のもう一つの焦点は「若者にとっての地元とは?」ということだった。アンケートからは、「地元で暮らし続けたい」という学生は59人でほぼ1/3。これを多くと見るか少ないと見るか? もう少しその内訳を見ると、「海外で働きたいから」「初めての場所で暮らしてみたい」といった、積極的に地元を離れたいと答える人も48人あった全体の27%がある意味、消極的に「地元」にこだわらない「学生もいた(17人・9%)。どこで暮らすか明確に答えていない人の中には、「まだ決めていない」人が22人いるが、京都のマイナスポイントを書いている人もいて、地元で働きたい人・地元を出たい人・それ以外に分かれるようだ。

地元で暮らし続けたいか?



座談会 京都で暮らすこと - 京都人 × 京都へやって来た人 -

アンケート結果を見ながら、京都で暮らす3名に、様々な視点から京都について語ってもらいました。出身地がバラバラな3人が見つめる、「京都」とは? そしてそれぞれが思う「ジモト」とは...

メンバー紹介は6ページで

京都の交通は意外と不便!?

ゆい 電車もバスも多くて便利だという意見が多いけど、交通の便が悪いと言っている人もいますね。

まゆこ バスに乗るのは大変。桜の時期に渋滞で1時間くらい動かなかったこともありました。

ゆい 時間通りに行けないのはかなり辛いよね。あと、京都は歩行者も自由(笑)

かとう 確かに! 最初来たときびっくりした。「信号あるよね!」って。信号で止まっているのは自分だけみたいな。

まゆこ (京都出身の)私はちゃんと止まりますよ?(笑)

京都の人は怖い!?

まゆこ 京都人は怖いという意見が多いですが。

ゆい そういうイメージがあったから、学生のうちに来たいと思いました。社会人になつてから「コミュニティに入る時は自分だけみたいな」

まゆこ 京都人は怖いという意見が多いですが。

かとう そうですね。最初は「あんな誰や?」「みたいな顔をされるけど、それは京都に関係なくそうなるかな。あと、京

まゆこ テレビとかでも紹介されて、そういうイメージがあるから結構きつそうと言われるけど、そんなことはないです。祇園とか、品のあるエリアでは、直接的に「帰ってください」「言えない相手もいるだろうし、そういう時に遠回しに言ったりしているのかな。それがイメージとして先行しているかも。そう考えると、日常で接している中にそんなお上品な場面はない。

かとう 祇園とか、品のあるエリアでは、直接的に「帰ってください」「言えない相手もいるだろうし、そういう時に遠回しに言ったりしているのかな。それがイメージとして先行しているかも。そう考えると、日常で接している中にそんなお上品な場面はない。

まゆこ テレビとかでも紹介されて、そういうイメージがあるから結構きつそうと言われるけど、そんなことはないです。

かとう 社会人の目線ではどうですか? 学生の多さは、すごく感じています。「京都に暮らして良かったと思うこと」で、大学が多い、他大学と交流できるなど、学生の数の多さを、学生自身が良い点として捉えていると知れたのは、発見です。あまりそこは意識してないのかなと思っていたので。さらに言えば、なぜ学生が多いことがいいと感じているのか、を知りたいです。

京都は学生に優しいまち!?

ゆい 学生が多く、同年代の人がたくさん集まるという点で、京都は良いなと思います。色々な人とふれあえるので、友達づくりやすいです。

ゆい 自由度が高いところですかね。学生団体に入りたいたいと思った時に、色々な団体があったし、学生にたくさんチャンスがあるというかも。ちろん、大人の人も関わってくれるけど、学生だけで運営するとか、「学生が主体となつてやっていこう」と言ってくださるのは、人数がいるから実現可能で。選択肢が増えるのも、たくさん学生がいるから「そだね」と思います。

特集 座談会メンバー紹介

- ①名前 ②出身地 ③京都のいいところ ④進学・就職したきっかけ ⑤今後も京都で生活したいですか？



- ①まゆこ
②京都市
③観光地がまとまっている！
地下鉄でどこでも行ける！
④地元だから。
エスカレーター式だから。
⑤No! ずっと住んでいるから。



- ①ゆい
②静岡県
③学生が多い!
④なんとなく。
⑤No... 気候がしんどい。
学生である間に京都に住みたかった。



- ①かとう
②富山県
③街並みがきれい。
老若男女が訪れられるところが多い。
④誘われて転職。
⑤△ できたつながりを大事にしたい&たのしい。

京都で働くってどうなん!?

— 大企業で働きたいから大阪や東京に行きたい、というのはどう思う? 京都にも大企業や有名企業はありますが。

ゆい

選択肢としては大阪の方が多いと感じますが、京都に働きたい企業があれば残ります。京都は企業と学生がお互いにもっと近づけたらいいのに。学生と協働したいという企業側の話もよく聞くと、学生側も早めに企業と接触したい気持ちがあるのにお互いにもっと近づけていないのがちょっと残念だし、何かいい方法はないかなと思います。

まゆこ

京都が地元だと、みんなが言う京都のいわゆる大企業も、身近すぎてすごさが全然分らないんですよ。学生はやっぱ大きいところや良いところで働きたいと、大企業志向が強いなと感じました。

かとう

そういう友達が結構いますけど、良いところって何を基準にしているのか、大きいところだと何が良いんだろ?とは思いますよね。

ゆい

そういって友達結構いますけど、良いところって何を基準にしているのか、大きいところだと何が良いんだろ?とは思いますよね。

京都、地元、はたまた大都会!?

— 今後は地元に戻りたい、大阪・関東圏に行きたいという人が半々くらいで、京都に残りたいという人は少ないようです。みなさんは、どうですか?

かとう

今は、地元に戻ろうとは思わないです。親からは、地元かも少し近くに来てほしいと言われていますが、なぜわざわざ選択肢を狭めに行かなければならないのかという思いがあって。あと、今がすごく楽しい。とりあえずは、好きなように生きたい(笑)それが無くなると、そろそろ落ち着こうと思ったり、たぶん帰ると思いますが、いずれは地元に戻返したいのか、何か返せる人間になって帰りたいという気持ちがあるので。

ゆい

仕事をするには都会の方がやりやすいので、都会に行きたいと思うけど、オフィスに行かなくても自宅のパソコンで出来る仕事などがあれば、地元に戻ると思いますが、やっぱり地元は、気候や物価など、暮らすのにちょうどいいです。

まゆこ

京都はお寺のイメージも強いけど、住んでいるところは住宅街で何にもないし、どうしても東京とか、都会に憧れます。あと、ずっと家にいるので、そろそろ家を出たいなと。社会勉強という意味でも、一人暮らしをしたいという漠然とした理由があります。京都には企業もあるし、戻ってきて大丈夫だという安心感とか、そういう余裕があるからこそ、京都を出てみたいですね。

かとう

京都に限らず、地元以外でいう場所だったら残りたいと思うだろう。私も地元から出て、住んでいたところからも出たし、今後は京都からも出るかもしれない……。

ゆい

— もし地元が京都だったら、ずっと京都にいたいですか?
大学か、社会人数年目で一旦京都から出てくるかもしれない。離れてからその良さが分かるというのもあると思うし、1つの環境にいるより、いろいろな環境で比較した方が分かることもあると思います。

若者にとって、京都は「大都市」なのか、それとも「地方都市」なのか?

京都市には、38もの大学・短期大学が所在しており、18歳人口は大幅な転入増となっている。この点は、同規模の人口の都市を圧倒している。歴史・文化を背景にしたコミュニティの豊かさという点においても他都市と比べて群を抜いている。これらの点では、京都は東京と遜色のない「大都市」である。フリーエタイプ人材が集まるコワーキングスペースが次々にできているし、京都市青少年活動センターのように、活動的な若者にとっての「居場所」の選択肢も、筆者がこれまでフィールドとしてきた広島や岡山のような「地方都市」より豊富であることは間違いない。

ただし、京都は「都市city」としての強みはあっても、グローバルシティとしてのインフラの魅力において突出した「都会urban」とはいえない。京都市在住の大学生のかなりの部分は、卒業と同時に市外に転出して就職する。国勢調査データ(2015年)を見ると、上京区、左京区、北区の20代後半の人口は、20代前半の人口の半分しかない。その理由は二つある。第一に、京都はビジネス都市としての大規模開発が抑制されてきたためである。第二に、グロ-

バル化にともなう東京の本社機能の強化によって、関西全体の地盤沈下が進み、大企業の雇用の東京一極集中が進んだためである。筆者の勤務先である同志社大学でも就職先の半数以上が東京に本社がある企業となっている実態がある。近年、首都圏は毎年10万人の転入超となっているが、そのかなりの部分が関西の大卒者の転出分で占められていることについては、もっと注目が集まっている。大卒人材を東京に流出させているという点では、京都は他の「地方都市」と同じ課題を抱えている。

また、京都で働く若者の多数派の意識を調査してみると、京都の若者はやはり「地方都市」的である。例えば、筆者が学生たちとともに昨年度以来、京都で働く20・30代の若者に対して行ってきた調査のなかでは、たとえば「東京は遊びに行く場所であって、人の密度が高すぎて暮らす場所とは思えない」と「大都市」を忌避し、「自然が近く、適度に都会でちょうどいい」といった地方都市的な環境を支持する者が目立っている。筆者の広島や岡山での調査と比べても、全く同じような回答傾向と言える。よく出かける場所、好きな場

所を尋ねても、若者は全国チェーンのタピオカドリンクの店や居酒屋、子育て世代は大型ショッピングモールのような「京都市的ではない」場所を挙げるケースが多い。NHKのテレビドラマ「京都人の密かな愉しみ」には、京都の歴史文化を体現したような若者の群像が描かれているが、社会学的観点からすると、そのような「京都人」は概念的存在に過ぎない。

京都の多様な専門人材や創造的な人材のネットワークの豊かさを背景にして、大企業や安定した一般企業への就職にあえて背を向け、やりがいや手応えのある仕事を求めるチャレンジングな若者の動きにはしばしば注目が集まっており、興味深い。しかし、その一方で、京都で働く若者のサイレント・マジョリティは地方都市的な「ちょうどいい」暮らしに惹かれている。この分断について考え続けていきたい。



畠田 健司
同志社大学社会学部社会学科准教授
主著「地方暮らしの幸福と若者」
(勤草書房、2017年)